

[講演要旨]

1611年慶長奥州地震津波に関する新出史料とその分析

蝦名裕一*(東北大学災害科学国際研究所)

§1. はじめに

1611年(慶長16年)に発生した慶長奥州地震津波に関する史料は、『大日本地震史料』(武者 1941), 『新修日本地震史料』(東京大学地震研究所 1982,1993)に多数収録されている。本報告では、上記の史料に収録されていない史料や、近年発見された史料について検証し、これらを含めて慶長奥州地震津波に関する史料や歴史情報について分析をすすめていく。

§2. 新出史料について

(1)旧相馬藩領における新出史料

相馬藩海東家所蔵の古文書群から、慶長奥州地震津波について記載のある『小高山同慶寺記録』、『小高山古記録』、『利胤君御年譜』などの新出史料が確認されている。

一、同年十月廿八日 奥州筋生波(ツナミ)相馬領海辺ノ者七百人、仙臺領二千八百人溺死
(『小高山同慶寺記録』)

これらの史料の内容については、従来相馬藩領で把握されていた「利胤朝臣御年譜」(『相馬藩世紀』収録)とほぼ同様であるが、新出史料によって①江戸期の相馬藩領内において1611年に発生した津波被害の情報が一定程度共有されていたこと、②この地震の範囲が「奥州」であり、相馬藩領以北でより被害が大きかったことが確認できる。

(2)旧仙台藩領において新たに確認された史料

安永年間(1772-1780)、仙台藩が編纂した地誌『安永風土記』(『宮城県史』収録)によると、宮城郡八幡村の八幡社はかつて門前に千軒余の街場が形成されるほど隆盛していたが、津波によって「町場も一時に水亡」したことが記されている(モリス 2013)。また、同史料によると、津波後社人たちは一部が利府町に移住したほか、同地に残った者も困窮し没落していたとされる。

宝暦7年(1757)に成立した南三陸町入谷の伝承を記した『入谷安倍物語』(『志津川町誌資料集 2』所収)は、同地の「大舟沢」という地名について「昔津波の阿かり候時此沢迄阿かりたる故」としている。また、寛政4年(1792)に仙台藩が編纂した『伊達世臣家譜』には、入谷邑に在住していた伊東清右衛門が、「慶長十六年十月遭海水溢溺死、此時流出武具及系譜」と記されており、慶長の津波によって同地域に人的・物的被害が生じていた事が読み取れる。

(3)旧盛岡藩領において新たに確認された史料と宮古地域の津波記録

旧盛岡藩領の宮古地域において、慶長奥州地震津波の被害記録として中心的に取り扱われてきた史料としては『宮古由来記』があるが、これは寛政10年(1798)に成立した『小本家記録』などが底本とされている。宮古地域には同様の内容を記した史料も複数存在しており、天保8年(1837)に成立した『重信公由来』(『田老町史資料編 4』所収)も同内容を記している。ただし、津波の発生時間について『小本家記録』は「昼七ツ時」、『重信公由来』は「昼八ツ時」としており、記述に食い違いがみられる。

慶長奥州地震津波によって流出・移転した常安寺の『口上書願上候事』によると、慶長18年(1613)に「津波にて寺・宝物共ニ海上ニ被取候」、「宮古之人民大分死去」、「藤原町人民ハ山江上り存命申仕候」と記述されている。なお、この史料は安永2年(1765)に成立し、『小本家記録』などが慶長奥州地震津波の発生年を慶長19年(1614)としている記載とは相違しており、『小本家記録』などとは別の情報源から記された史料といえる。

田野畑村羅賀の有力者であった大澤永喜(1868生)が記した『大澤氏家由緒』は、慶長19年(1614)に発生した津波の際、同家は高台にあるため被害を受けなかったことが記されている。

§3. おわりに

今回、従来1点の史料しか把握されていなかった相馬領内において、慶長奥州地震津波について記した史料が複数確認された。また、宮古地方では従来中心的に用いられてきた『宮古由来記』以外にも、これとは異なる情報が存在しており、それぞれの史料の成立背景を含めた検討が必要といえる。

参考文献

- J・F・モリス, 2013, 「天道家文書」を読み解く, 多賀城市文化財調査報告書, 113, p1-3.
田老町教育委員会, 1993, 田老町史資料集近世 4, pp494-499.
東京大学地震研究所編, 1982, 新収日本地震史料続第2巻, p 97-101.
東京大学地震研究所編, 1993, 新収日本地震史料続補遺, p 42-46.
宮城県, 1954, 宮城県史 24 資料編 2, 宮城県刊行会,
武者金吉編, 1941, 増訂大日本地震史料, 1, 694-703p.